

# バラ科ニシムラキイチゴ(Rubus nishimuranus) 四国で発見

著者	鳴橋 直弘, 中山 徹
著者別表示	Naruhashi Naohiro, Nakayama Toru
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	62
号	1
ページ	19-21
発行年	2014-11-01
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00053569">http://doi.org/10.24517/00053569</a>



鳴橋直弘<sup>1</sup>・中山徹<sup>2</sup>：バラ科ニシムラキイチゴ (*Rubus nishimuranus*) 四国で発見Naohiro Naruhashi<sup>1</sup> and Toru Nakayama<sup>2</sup>: *Rubus nishimuranus* (Rosaceae) grows in Shikoku, Japan

ニシムラキイチゴ (別名 ハチジョウクサイイチゴ) は小泉源一先生によって、小笠原父島の旧袋沢村で西村茂次氏採集の植物に基づき新種として発表された (Koidzumi 1918)。正基準標本は東京大学総合研究博物館に収蔵されている (Momiyama and Ohba 1988)。その後伊豆諸島の八丈島でも見つかり (Nakai 1921)、この植物の分布は小笠原と伊豆諸島のみで、本州本土での報告はない (Naruhashi 2001, 加藤・海老原 2011)。

筆者の一人、中山は数年前より徳島県海部郡海陽町鯖瀬で奇妙なキイチゴ属植物に気づいていた。2012年秋より標本を作製し、同定のため標本が鳴橋に送られた。

鳴橋は送られた標本はトヨラクサイイチゴかニシムラキイチゴと思った。ステライル標本では両者を区別することは不可能であるからである。ニシムラキイチゴは本州本土、四国、九州では見つかっていないこと、およびトヨラクサイイチゴは本州、四国、九州ではぼつぼつと見ついていることから、疑問は残るが、一応トヨラクサイイチゴとして返事をした。そして、両者の区別点は、トヨラクサイイチゴは不稔で、ニシムラキイチゴは正常に実るので、できれば、来春果実を見たいと付け加えた。

中山は鯖瀬の生育地で、4月7日に花を、5月25日に果実を観察した (図1)。その結果、次のように結論された。

カジイチゴとクサイイチゴの雑種は3つの型に分かれる。染色体レベルでは2倍体、3倍体、4倍体である。2倍体は花粉の稔性も悪く、不稔で、果実はほとんど作らない。よくできても花床の上に3~5個程度である。3倍体は不稔である。4倍体は多くのキイチゴ属植物のようにきれいに実る。種子は正常に発芽し、他のキイチ

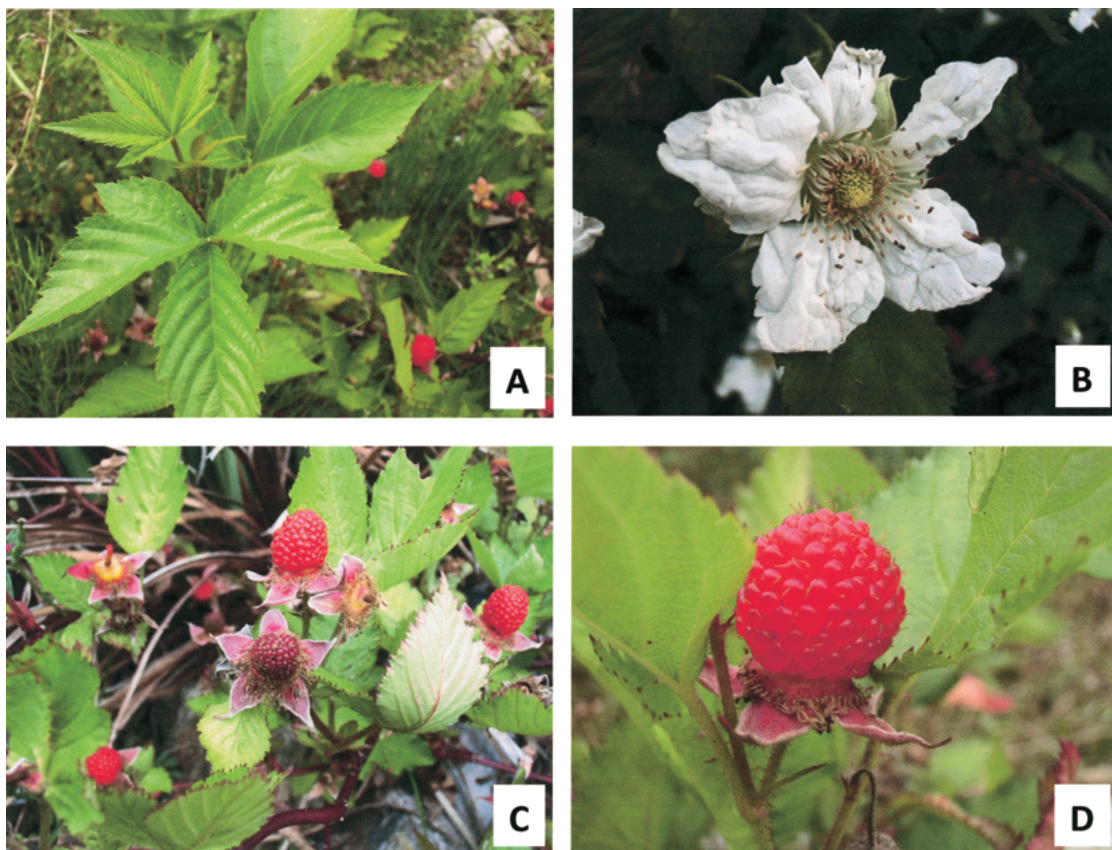


図1. 徳島県海部郡海陽町浅川字鯖瀬のニシムラキイチゴ。  
A. 初年茎。B. 花。C. 果実を付けた植物。D. 1個の集合果。



図2. 大阪市立自然史博物館に収蔵されている証拠標本の内の1点（2013年5月25日採集）。

チゴ属植物と同じである。だから雑種起源の種と考えられる (Naruhashi 2001)。

2倍体は雑種のトヨラクサイチゴであり、4倍体はニシムラキイチゴである。3倍体の起源は、カジイチゴとクサイチゴの直接の雑種起源か、それともニシムラキイチゴとカジイチゴの雑種なのか、今のところ不明である。トヨラクサイチゴとニシムラキイチゴの形態的特徴については鳴橋の報告 (Naruhashi 1976) がある。

徳島県鯖瀬の植物は図1C & Dのようにきれいに実る。だからこの植物はニシムラキイチゴである。

ニシムラキイチゴは小笠原の父島と伊豆諸島から報告されている。本州本土では見つからない。ましてや四国は初めてである。この場所の植物が鳥によって伊豆諸島から運ばれてきたのか、この地で独立的に起源したのかは不明である。

**生育地:** 徳島県海部郡海陽町浅川字鯖瀬, 北緯: 34° 38' 38" 東経: 134° 23' 5", 標高5 m, 国道脇の駐車帯で半日影, ツツジの植え込みに沿って1×10 m の範囲に生育。この付近にはクサイチゴは見られるが, カジイチゴは存在しない。

**証拠標本:** 徳島県海部郡海陽町浅川字鯖瀬 中山徹 no. 23, 5 Nov. 2012 (St.); no. 165, 7 Apr. 2013 (St. & Fl.); no. 165, 25 May 2013 (Fr.); no. 191 & 192, 23 Sep. 2012 (St.); no. 201 & 202, 5 Nov. 2012 (St.). 上記全ての標本は大阪市立自然史博物館 (OSA) に収蔵済みである (図2)。

#### 引用文献

- 加藤雅啓・海老原淳 (2011) 日本の固有植物 国立科学博物館叢書11 pp. 76 & 318. 東海大学出版会, 東京.
- Koidzumi, G. (1918) Contributiones ad Floram Asiae Orientalis. Bot. Mag. Tokyo **32**: 249-259.
- Momiyama, Y. and H. Ohba (1988) Catalogue of the type specimens preserved in the Herbarium, Department of Botany, the University Museum, The University of Tokyo part 3. *Rosa* and *Rubus* (Rosaceae) The University Museum, the University of Tokyo Material Report no. 16. pp. 1-147.
- Nakai, T. (1921) Notulae ad Plantas Japoniae et Koreae XXV. Bot. Mag. Tokyo **35**: 139-153.
- Naruhashi, N. (1976) Taxonomical notes on the hybrid between *Rubus trifidus* and *R. hirsutus* (1) Morphology. J. Geobot. **24**: 26-32.
- Naruhashi, N. (2001) *Rubus*. In: Iwatsuki, K., D. E. Boufford and H. Ohba (eds.) Flora of Japan vol. Iib, pp. 145-169. Kodansha, Tokyo.

(<sup>1</sup>〒591-8022 大阪府堺市北区金岡町 1046-1; <sup>2</sup>〒775-0002 徳島県海部郡牟岐町大字橘497 <sup>1</sup>Kanaoka-cho 1046-1, Kita-ku, Sakai 591-8022, Japan; <sup>2</sup>Tachibana 497, Mugi-cho, Kaifu-gun 775-0002, Japan) (Received October 30, 2013; accepted April 5, 2014)